

まえがき

森は、地域独自の、森林と関わる「文化」を育んできた。一方、人間の森林利用のあり方は、気候や地形など様々な物理的環境条件とあいまって、森林の成り立ちに影響を及ぼす。その意味では、それら利用の基盤となる「文化」が森林を育んできたともいえる。つまり、森林の成り立ちや、森林と人間との相互作用というのは「文化」まで掘り下げて考えるべき課題なのである。本シリーズにおいて、一見、森林科学とは関係のなさそうな「文化」を本巻のテーマとした理由はこのことによる。

ただし、「文化」というのは総体的で、なかなか捉えにくい概念である。そこで、本巻では、その源泉となる人々の自然（とくに森林）に関する知識や認識、信仰——これらは「民俗知」と総称される——に注目することとした。

世界中いかなる地域であれ、森とともに生きる人々は、日々の生活においてまわりの森林に関する広範な知識や、それらを利用する技術・技能を集団内に蓄え、世代を超えて伝えてきた。また、そのような森と人との関わりのなかで、人々は独自の信仰体系や世界観を構成し、森林利用にかかわる規範やしきたりを形成してきた。民俗知と称される、地域の人々がもつこれらの知や森へのまなざしは、森林を母体として育まれる「文化」の源泉といえる。

しかし、いま、そのような民俗知のあり方は大きく変わろうとしている。あるところでは、国家や国際社会の思惑に翻弄され、また、あるところでは、地域社会内部の変化により自然消滅しようとしている。とりわけ重要なのは、住民主体の資源管理という文脈において民俗知の有用性が「外」から評価され、科学知との統合が提起されてきたことである。しかし、それらの取り組みは理念通り進まず、多くは困難に直面している。

本巻では、日本国内および海外の様々な森林地帯に暮らす人々の社会を対象として、民俗知の現代的なあり方について紹介する。その上で、森林保全や資

まえがき

源の管理と持続的利用、地域づくりといった現代の森林地帯が抱える社会・環境問題とそれがいかに関わっているのか、あるいは関わりうるのかについて論考する。そして、現代社会における新たな森と人との関係性を考えていくための視座を探っていく。

森林科学を軸とする本シリーズのなかで、このテーマを取り上げることは、これまで別々に論じられてきた分野間の扉を開く意義もある。これまで、森林に関わる「文化」は、森林学（林学）ではわずか数名の論者によって提唱されるに過ぎなかった。その一方、資源管理学や地域開発論などでは中心的な関心の一つであり、多くの知見が蓄積されてきた。本巻では、その分野間の隔たりを架橋すべく、文化人類学や日本民俗学を専門とする地域研究者にも執筆陣に加わってもらい、事例報告のみならず、民俗知や森林文化の総説にも多くのページを割いた。

また、これまで日本国内と海外（特に豊かな森林が広がる熱帯諸国）の事例に関しても、その文脈上別々に論じられることが多かった。森林資源利用をめぐっては、概して海外の事例では過剰利用が、日本の事例では過少利用が懸念されるというように対照的である。本巻では、前者での資源管理の文脈で注目されてきた民俗知のあり方に加え、近現代における民俗知の消失、あるいはその継承問題を取り上げる。これによって、両者を同時代に生きる人々による共通の問題として理解することが可能となる。

本巻の各章では、世界あるいは国内各地の森林を舞台として、そこに暮らす人々のなかで培われてきた民俗知の現代社会におけるあり方についてローカルな現場から論じられる。ただし、先に述べたように、海外の事例と日本国内の山村では、民俗知が取り上げられる社会的文脈が異なる。そのため、本巻は大きく二つに分け、前半で海外の事例を、後半で国内の事例を扱うこととした。

まず、第1章では、民俗知やそれと類似した概念の整理をおこない、「森とともに生きる人々の民俗知」に注目する現代的な意義と本巻での主な論点を紹介する。第2章では、民俗知が研究者のなかでどう論じられ、生態系保全の場でどのように「取り入れ」られてきたのかについて、科学知と対比しながらレビューがなされるとともに、カメリーンの熱帯雨林に暮らす狩猟採集民バカの植物知識の事例から、民俗知のもつ特徴とその現代的なあり方が論じられて

いる。

第3章と第4章では、舞台が東南アジア島嶼部——森林保全と開発がせめぎあう最前線の一つ——に移る。第3章では、今なお精神的・物質的に周囲の森林と深く結びついているボルネオの狩猟採集民、ブナンの民俗知について具体的に述べられる。そして、ブナンの人たちが、森との関わり方や捉え方の異なる他民族や外部者などといかに協働しながら環境保全活動を展開してきたかについて論じられる。第4章では、森林をめぐる協働における民俗知に直接焦点があてられる。インドネシアのセラム島とスマトラ島という二つの地域で、森林をめぐる利害関係者（ステークホルダー）の協働がどうつくられ、そのなかで地域住民の民俗知がどう関係してきたのかが明らかにされる。ステークホルダーの間で用意される「協議」の場の性格と、そこで効力を失ってしまう知の存在について考察されている。

第1部の最終章である第5章は、カナダの先住民、カスカを対象としている。本章では、森とともに生きてきた古老たちの暮らしからカスカの民俗知が語られ、それらがどう変容したのかが述べられる。また、文化継承において筆者など外部者が果たしうる可能性に関しても言及している。知識の担い手減少による民俗知の変容がテーマの一つとなっており、その意味では、第1部と第2部をつなぐ内容となっている。

第6章からは第2部に移り、国内の事例報告となる。第6章では導入として、日本国内の山村における森林と人との関わりの変化についてレビューがなされている。そして、四国山地の山村で受け継がれてきた山や森林との関わりと、そのなかで培われてきた民俗知について、とくに和紙原料栽培という生業を軸として述べられる。そこで浮き彫りになるのは、林業だけではない山の多様な生業の姿であり、さらには、それらに関わる様々な人々が、例えば和紙生産などにおいてつながることで構築される山村の全体的、あるいは統合的な民俗知のあり方である。続く第7章では、一般的にマタギと呼ばれる、東日本豪雪山岳地帯の山村で森とともに生きる山人（やまびと）たちの民俗知が対象となっている。マタギたちが、日常的に関わっている自分たちの山をいかに「知っているか」が述べられる。それは、きわめて個人的かつ具体的な経験の記憶であり、当人たちがその地に暮らすことのアイデンティティと分かち難く

まえがき

結びついている。

以上の二つの地域は過疎・高齢化の進む山村であり、おそらく「消えゆく」であろう知識を対象としている。しかし、国内の山村住民あるいは森林と関わる人々の民俗知が全てそうであるとは限らない。そのことを明快に示しているのが第8章である。本章では、現代社会において栄養的あるいは経済的にはさほど重要性をもたないキノコ採りや山菜採りといった森林利用にみられる民俗知が紹介されている。そして、それらを探る「楽しみ」に注目し、活動が持続するなかで民俗知が深められていくプロセスについて論じられる。その上で、山菜・キノコのような資源およびそれに関わる知識が、住民主体の地域活性化に寄与しうる可能性についても言及している。

このような地域住民の民俗知や、森林利用に関する地域の慣習、文化財は「外部者」にとってはどのような価値や魅力を持ちうるのだろうか。それを考える上でヒントを与えてくれるのが第9章である。本章では、国内の森林保護制度や文化財保護制度およびそれら保護地域で展開される観光形態について整理した上で、これら保護地域に関わる住民の知識や慣習が観光商品としてどのように「資源化」されてきたのか、あるいは「消失」してきたのかについて屋久島の事例などから論じられている。

以上の事例報告をふまえ、最終章である第10章では、各章で示された民俗知が有する多様な側面についてまとめている。そして、森林保全や持続的な森林利用、あるいは森林利用を通した地域づくりなど、よりよい森林と人の関係性を構築していくために民俗知や地域の文化はいかに関わりうるのか、というテーマを考えるための視座が提示される。

これら各章で示されるように、森とともに何世代も生きてきた地域住民たちのまなざしや培われてきた民俗知の世界は深く、そして広い。本巻を通じて、そのような豊かな意味世界へと一人でも多くの人をいざない、森林と文化についてより深く興味を持ってもらえることを編者一同、切に願っている。

姥原一平・齋藤暖生・生方史数